２．新分科会設立のご挨拶
日本看護コミュニケーション学会設立のご挨拶

阿部恵子[1], 杉本なおみ[2], 高山智子[3], 藤崎和彦[4], 孫大輔[5], 曾田信子[6], 山口知香枝[1]
[1]金城学院大学看護学部看護学科, [2]慶應義塾大学看護医療学部, [3]静岡社会健康医学大学院大学, [4]岐阜大学医学教育開発研究センター, [5]鳥取大学医学部地域医療学講座,
[6]信州大学学術研究院医学保健学域保健学系

1.　はじめに

看護の質はコミュニケーションの在り方に大きく影響を受ける。長期化したコロナ禍における行動制限により働き方や授業のあり方が大きく変わった。新人研修では集団研修の中止や、大学では対面授業からオンライン授業への変更の影響から、人間関係が希薄となり、心の通う人間関係への発展が難しくなっている。加えて、ソーシャルスキルが低いほどネット依存傾向の「仮想的対人関係」が高くなるとも報告されている(森脇 2022)。コミュニケーションのあり方が変化している現代において、表面的なコミュニケーションスキルを身につけるだけでは、真の看護の質の向上に至らないのではないだろうか。人々が何を考え、何を求めているのか、また、何をどのように伝えるのか、さまざまな分野の学問領域から多面的に捉え、看護に関わるコミュニケーションについて検討する必要があると考えた。

2.　「看護コミュニケーション」を広く扱う

コミュニケーションは、看護師にとってはケアの基盤となる非常に重要な臨床能力である。患者とのコミュニケーションを通じ、その状態、感情やニーズを 24 時間把握できる立場にある看護師は、他の医療職より多くの患者情報を持ち合わせていることが多い。また、専門性の高まりにつれ細分化が進む今日の医療・介護現場においては、看護師を含む多職種チームで「看護」に関わる情報を収集し患者支援に役立てることの重要性がさらに増しつつある。この要となる情報を他職種と適切に共有することで最善の医療の提供が可能になることに異論の余地はないであろう。

当学会では、このような医療現場でのコミュニケーションを狭義の「看護コミュニケーション」として取り上げる一方、看護という「コンテクスト」において発生するコミュニケーション全般もその研究対象とする（図１）。この広義の「看護コミュニケーション」は、医療現場に限らず、広く社会全般において発信される広告やメディアの言説など、いわゆる「マス」レベルのコミュニケーションまでも含む。また「発信者／受信者」や研究者自身が看護職（看護師・保健師・助産師）であるとは限らない。その分析にあたっては、コミュニケーション学研究に不可欠な「プロセス性」の前提のもと、対象者独自の「コンテクスト」理解に基づく「意味づけ（記号化過程・記号解読過程)」や「ノイズ」などのコミュニケーション学の重要概念を適用し、対象者理解をさらに深化させるための手掛かりを得る。

このような狭義・広義の「看護コミュニケーション」事象の中から、人文科学・社会科学・自然科学にわたる幅広い視点で看護の役割を担うすべてのコミュニケーションに資する根拠を探究し、教育に役立てることが本学会の目的である（図２）。

図１：コミュニケーション・プロセス（杉本 2013, p. 17）

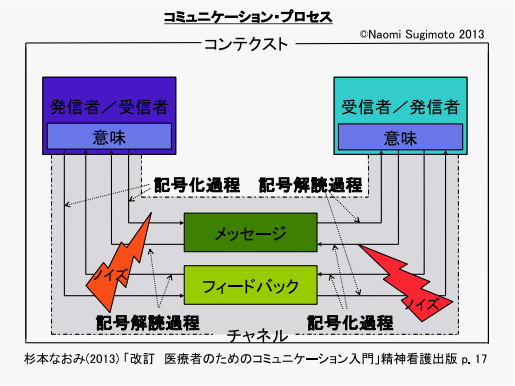
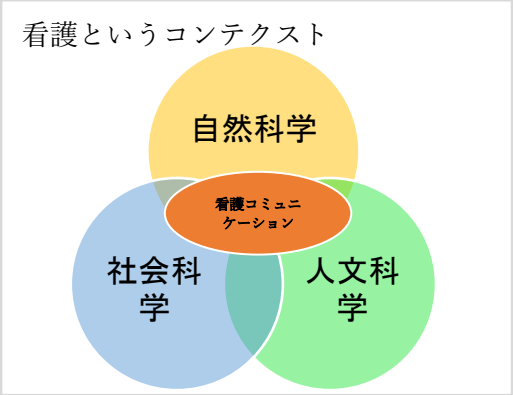


図２：　多面的に捉える看護コミュニケーション



3.　日本看護コミュニケーション学会設立

看護においてコミュニケーションは基盤であり、重要な臨床能力の一つであるが、看護コミュニケーション教育は各技術演習に含まれていることが多く、それぞれの看護領域の学会で扱われてきた。そのため看護コミュニケーションに特化した研究・教育に関する学会は存在していなかった。2022 年 2 月、木内理事長のもと 7 つの分科会を束ねるヘルスコミュニケーション学関連学会機構が設立された。同年、本機構の分科会の 1 つである日本医療コミュニケーション学会の前身の医療コミュニケーション研究会のメンバー4 人が中心に看護コミュニケーション学会の設立を検討した。

医療コミュニケーション研究会では、自然科学系だけでなく、人文科学系、社会科学系の教育者、研究者及び臨床家による学際的な専門家の立場から多面的に医療におけるヘルスコミュニケーションを熱く議論してきた。今回、看護は働く場面が広く、多くの情報の収集と伝達を行うことから、看護に特化し学会を設立するに至った。医療コミュニケーション研究会のエッセンスを踏襲しつつ、上述のように看護コミュニケーションを広く捉え、保健・医療・福祉・介護現場における看護コミュニケーションの分析、研究、教育を行うための学際的情報交流をはかることを目的として、日本看護コミュニケーション学会を立ち上げた。

昨年度のヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～では、日本看護コミュニケーション学会分科会として、一般口演４題、ポスター２題の発表があり、約 30 名の会員登録があった。2024 年のヘルスコミュニケーションウィークでは本分科会の第 1 回学術集会を計画している。多くの方達と議論し、看護コミュニケーションの質の向上に寄与したいと考える。

参考文献

森脇愛子(2023) 大学生におけるシャイネス、ソーシャルスキル、インターネット依存傾向との関連，日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集，300.

杉本なおみ(2013)．改訂　医療者のためのコミュニケーション入門，精神看護出版.